



改正  
 補  
 佐  
 世  
 家  
 時  
 記  
 葉  
 字  
 附  
 録  
 五

中村俊定文庫  
 文庫 18  
 886  
 5



雜之卷目錄

賦物之事

兼

和漢の事

ハ

万句十句上自韻

百韻の式

ハ

米字の式

七上二候の式

ハ

易の式

源氏の式

ハ

五十韻の式

四十四の式

ハ

歌仙の式

長哥行の式

ハ

短歌行の式

十八公の式

ハ

首尾の式

表合の式

ハ



發句の事 ニ 脇句の事 ニ

第三の事 ハ 四句目の事 ハ

月花定座 ハ 去嫌大意 ハ

句數並去嫌 ハ 季節の跨物 ハ

嫌古式八ヶ條 ハ 指合の事 ハ

正花の事 ハ 戀の詞 ハ

切字の事 ハ 発句の格 ハ

押字の格 ハ 抱字の格 ハ



補作諧歳時記禁草

雜之部 曲亭主人纂輔 藍序青益増補

卷之式 賦物

貞徳云連哥六五箇十箇云

から、非言まで賦も連哥をいへば端作りとも俳諧之連哥と  
書ききこへ。蕉門の賦物の沙汰あり、されど心得のあり  
小大略と記す。その草賦物の文字耳小字八面、綴  
賦し物の文字、さうありける文字とことあらん、五箇か  
ら、いふ事おれ、発句小字とていふ、其ある文字とこと  
たよ、山櫻の発句、犬とていふ、犬、山、よ、こ、こ、ら  
故、蜂、魚、う、さ、こ、あ、る、べ、い、餘、い、こ、も、小、准、一、字、露、頭  
二字返音以下、百韻の俳諧やとていふべし、つらとていふ

賦何衣連哥

年毎ふみまどとと花ハ櫻ノ部

賦何袋俳諧

あれもふとらう何ふな世々の春

これハ上賦とらふものあり、端作りの何とらふ字ハあつて  
みゆるもの物や、句中の春とらふ字と呼ぶるあり

春袋と取る物あり始の句ハ花衣と取るあり

様何

天の川水若くはしりしりしりしり

是ハ棟若と取るあり餘ハ准へあるべし

一字露頭

ちのぢりま寝ぬい浮世の杜宇

是ハ句中の寝と音ハ取あはるべし

二字反音

龍で飼とらぬも高し時鳥

是ハ句中のきもとつて杉と聞あはるべし

三字中畧

去る来る羊のあゆみや魚千里

是ハあゆみやとる字の中と畧して細と取あはるべし

三字上畧

蝶鳥やちりういとまゝる花鳥

是ハとまゝるの上と畧して九と取あはるべし

三字下畧

月ハひとの影ハ目数のあはるべし

是ハひとつのつ文字と畧して人と取るべし此外四字上  
下畧あるハ難波津と上下畧せば庭とあるやうの事又  
五文字中三字畧あるべしつむらりとのふと中三字畧せ  
ば爪とあるとくひ又二字借とるハ白雪ハ山の額の化粧  
の如しこれハ句中のけとも聞せざるべし

二字除篇

龍門あらで都へのしと鱈の魚

是ハ鱈とる字の魚篇と取て雪と仕立し

他 添

鶯やよび哥毎ふとね題目

是ハ毎の字ハ篇と添て梅とあはるべし

和漢之事

大々俳諧の法と守るべし和漢ともふ  
五句と以て限りとも但し漢の對お至り

六句ハ可及事景物草木亦貞教和漢ハ通用せし  
百韻ハ一の物ハ和のこより出たらば漢ハまこと異名にて  
用ゆるともあはるべし二句の物ハつづくハ万葉の書分ハ  
用ゆるべし和漢ハ和漢ハ韻字と用ふべし漢和ハ漢ハ和ハ韻  
奉句ハ和漢ハ漢ハ韻字と用ふべし漢和ハ漢ハ和ハ韻

万句 千句 十百韻

支考曰連非の二卷と云ふ  
百韻と數の限りあり

十巻と云ふぬれば千句と云ふは百巻と云ふぬれば万句と云ふ  
十百韻と千句の差別は二座と十座のちがひゆく去聲の  
用捨ある  
表八句七句裏十四句九句目月二の表  
初目花  
〇名あり  
十四句目月二の裏十四句九句目花三の折  
二の表裏  
〇名なし 名残の表三の表 同裏八句目花 支考曰  
四のひきぎとのしく、名残の折といふるを、  
表八句七句裏十二句七句目月二の裏十二句  
初目花  
〇名なし 三の表 同裏  
〇名なし

百韻

表八句七句裏十四句九句目月二の表  
初目花  
〇名あり  
十四句目月二の裏十四句九句目花三の折

米字

七十二候

支考曰七十二候といふ百韻と三折  
〇名なし

易

表八句七句裏十二句  
〇名なし

源氏

支考曰源氏といふ三折ありざるは哥仙の愛數ふ  
して中項の名目ありと云ふ其名は源氏の六十

帖ふよねり、〇哥仙三十六句ふ、二の折二十  
四句く、〇六十句とも花月の定座同

五十韻

百韻の二の裏と云ふ  
〇名なし

四十四

支考曰四十四ハ五十韻の愛  
數ありて、二の折の裏と八句と

あせり、其日其夜の時宜と見合せ或ハ縮り或ハ延して、  
一座の首尾と作るべきとあり、其名ハ四十四と云ふは、  
例のしく俗習あるを称せば、  
祝言のひきぎとのしく

歌仙

表六句目月裏十二句  
〇名なし

同裏六句目花 〇支考曰哥仙ハ名目の風流也云々ハ

長哥行

表八句七句裏十二句  
〇名なし

六吟の名とあり、  
〇名なし

短哥行

表四句目月裏八句七句初月名残の  
〇名なし

哥行ハ短哥行も求韻の俳諧の爲ふと例の支考が新  
製ありとの辨ハ東花式及び和漢文標求韻の序小巻

十八公

表十句九句裏八句七句〇十八公といふ  
千歳不愛の松と表りて數とあり

首尾

表六句目月裏六句目花○支考云首尾の吟ハ一座の時  
宜ふ或ハ奉納の諸願と祝ハ或ハ歳暮歳旦の賀と  
始終をこのゆの意ありさるハ六々とも八々とも  
表と裏の首尾と合せて月花二座模様なり

**表合**

八句目月 **西華集**支考凡例ニ云此表ハ神祇あり教  
あり意無常とえらまひ名所をのひ人の名をのひ二卷の

始終をこのゆの意ありさるハ六々とも八々とも  
爰ハ旅寐して卯七と表合あり我ハ詰て曰ハ表合亦の

非諾ハ尋常の式と替るハ表の内ハ一卷の姿にて  
去燵をもわらうち用ふまき事ふりとり一段

面白くくと答ぬニ子  
諸抄云一座の巻頭

**發句**

ふて羽ハ聞かると  
人の外あるべしむ句の体伸くと和くと詞をきらふ  
心をのうらむべし切字の道理ハ切字の条ハ注を

**脇句**

発句の時節と違へもその餘情とひとべし  
発句神叙意無常時宜述懐ふれば脇句も同  
くこの何らひわらふし発句雜ふれば脇句雜ふ諸抄  
云韻とてふもして留の事ふまきふもあらむ切者の業

あまを初心のまゝとふわらむと云いませぬあまの  
あてこの故と明もど青藍桜むるハ脇ハ哥の下の句ハ

して上の發とつけ結ぶと正格と也但ハ發句脇句ハ限ら  
長句ハ意とて短句ハ

脇句の体と失ふもや初心のまゝとふわらむといま  
ひたこの故とあらむとも文字よて留の時ハ太りこ

意切て脇句の体と失ふまハ字留よりといつてあまの  
べしてふもよて留るる例といふハ續虚栗ハび人ニ我名

よむれん初時雨芭蕉又山茶花と病をよして由之冬  
の目霜月や鶴の行むらびわく荷兮冬の朝日は哀

ありたり芭蕉曠野いらくの名もじつしや  
春の草荷兮打む蝶の夢さあまる芭蕉

**第三**

諸抄云丈高く脇句ハ轉むるとよりこま句からゆら  
ハ才三の本意ふわらむ第三ハて留ハ留ハ留のまひ

ふてまじつと云これゆその故と明もど青藍桜むるハ  
發句の次女ハ轉せしめかま意と残して下句ハ及ん

と才三の格とてその其故とあらむもてあらんか  
あて下と結ぶまきハ大と意残つてハ才三の体と去

故ふてふらの留めてまうとて但してふらの手は波留るる格は定めてまうとて波留るる格は何の意をも意を残して下句ふ及むらん何の意をもいふ道理とてまきゆく句作の意ふまうとて文の目花棘馬骨の霜ふ咲く杜園同上三種檜山家の体と木の葉降芭蕉朝顔の巻三井落まこめふ月出ふなり芭蕉様衰三雲雀鳴小田小土のりあれや珍頑定まうとてふとあつとて作例如此中ふ月出ふなりとてまうとてお箱の句ハ四句目似ととも意の切ぬとてオ三の体とあり准とてまうとて諸妙ニ云ありたりお箱の句ハ四句目とてまうとてかあまふしとてまうとて其故と明とてまうとて青藍按とてまうとてと残四句目ふ及むとオ三の体とてまうとての意とてまうとてけ結とて四句目の格とて故ふ作意と求めむとてまうと

四句目

月花定座の心得

去來云花ふ定座あつと先師芭蕉給ふ當流とてるとて用ふ花と引上るふ二品ありハ二座ふ賞翫とてき人ありて其人ふ花と望むとて其人の句前ふ至り春

季と出して花と望むあり、是と呼出の花とふふとつハ貴人功者の人他譲とて人ありて呼出しと待む花と作る又雨吟の時互ふ二本つの句ぬふれば辞退ふ及むと引上て作ると故りれ呼出ま呼出ま者の過りて花ぬの罰ありて下答〇青藍云月花ハ二巻の饒りて定めて座ありふわ附合の辞義まゆぐりて後後とて時賞翫の月花と折端へいこむ故折端前の高句とて定座とて例ふ其故と知るときハ月花の座とてまとて二巻の變化ハ自在あり但し月ハ折端へむとて例ありて月の障ありて止事と得られとあり花ハむとて例ありとて嫌とハ天象地形より草木鳥獸も器財食服と目ふと耳ふひとて見とて遠慮ありとてもとて人の制せとて我と用捨とて見とて我門ハ一理万通とてハ抑俳諧の式ハ楚仙無言抄ハ濫觴て貞徳の御傘ふひとて連哥の家ふあとて應安の新式とて形

去嫌大意

貞章式云去

例ふ姿情の行ぢぢひありもどづ袖あふふ河遠き  
 小遙う天ふ空王雲よ曇りてのこごひ二句去の式やま  
 どと蕉門一流の姿のこごひ誰う二句あて附べらん  
 古式ふ牡丹ハ二座一句の物故ふ排ハ廿日草深見州ホの  
 異名あて今ひのあふべとていふも音と訓  
 かいらりとも同座の百韻は同物之三ッ出らふ  
 實は作者の不機轉のあへしごいへ牡丹のけりま  
 暗皮の牡丹といひ或ハ牡丹餅とつゞきハ植物の牡丹ハ  
 あらざれ折と去面とつゞく五句も三句もどづ  
 ホと異名といひ異体といふ古式今式の差別餘ハ准て  
 まるへハ流布の排式ハ却今より  
 抄中へハ去聲のまじり  
 姿情の行ぢぢひありもどづ袖あふふ河遠き  
 式とあて貞享式よりよる

句数并去嫌

表八句小嫌ふ物

神釈意無常述懐懐旧名  
 所同字病体人名小嫌ふ

と諸抄ふとえり青藍云病体人名嫌ふといふと  
 初懐紙才雪村が柳ふ行掉とと冬の日月影

小利休の家と鼻ふのけ句塞才西行が軍法とあり小  
 夜ふけて三の作例あり按むるふ風雅小富る古人の名

表の... 推兵衛八兵衛の... 障子... 棋柱つ

病体あり... 源氏物語

春秋... 景物多きとあり

夏冬... 一句より三句まで

神祇... 一句あて

神祇... 三句云ふ

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句

神祇... 一句



二句より多く○人倫 **居所** 一句をこゆる、三句より  
と人倫二句去あり、居所 〇居所と居所二句去

あ **旅体** 上ふ **夜分** 上ふ **生類** 二句より多く、  
〇生類と鳥 〇生類と鳥

の如く、愛して二句去あり、虫と虫 **植物** 二句より多  
獸と獸、鳥と鳥と三句去あり、

木と木、草と草、三句去あり、 **名所、國の名** 二句の  
木と草と變アて二句去、

〇名所と名所、國の名とい **衣類** 二句より多く、〇衣類  
名所と變アても三句去、 〇衣類、三句去あり、

**降物** 二句より多く、つげも、雪雨も、  
〇降物と降物、二句去、 **從算物** 二句より多

上ふ **天象** 上ふ **食類** 二句より多く、〇食類と  
同じ、 〇食類、三句去、飲食と

〇二 **時分** 夕時分と朝時分と、三句去、  
夕時分と朝時分、行越をきり、  
句去、

**火体、風体** 二句とつげ、〇火体と  
火体三句去之、風体同断、 **支体** 三

去 **二句去** 車、馬、舟、頂、小間、折、生類、添水、案山  
子、鳴子、雨、露、手、袂、禪、偽、よ、

誠、月、朔、日、二日の日の字、月、日、星、今、ふ、け、の  
たぐひ、杖、拳、違、ゆる、も、一、理、方、通、と、以、て、餘、ハ、准、ハ、あ、る、

〇 **三句去** 同字、月、月、次、の、月、正、花、小、草、木、の  
花、竹、小、竹、田、風、小、木、の、字、餘、ハ、准、ハ、

〇 **五句去** 同季、霞、田、竹、月、  
波、夢、枕、煙、船、路、 **七句去**

櫻、小、花、白、い、小、香、聞、小、寝、の  
字、神、小、神、集、餘、ハ、准、ハ、あ、る、 **季節の跨物**

〇 **數入、出替、彼岸、峯入** 後の彼岸、逆  
の峯入と断ら

むとも、秋、季、子、小、つ、れて、秋 **鷺、鴨、目、白、鳥、類**  
〇 **數入、出替** 〇 **鷺、鴨、目、白、鳥、類**

〇 **白、瑠璃、鳥、鷓、胡、鷄** 春秋の季、小、つ、り、  
帰、来、の、二、字、と、断、ら、る、

其、時、其、季 **掠、鳥、揜、鳥、菊、戴、豆、廻、し**  
〇 **掠、鳥、揜、鳥、菊、戴、豆、廻、し**

山雀、日雀、四十雀  
この類ハ秋のうさふ耳をこ  
ふれば、常々こも行とも断

駒鳥  
春あはれさきさきといひ、  
秋おも用ふべきや、  
給

掛  
秋の一字と断らざれば、  
秋の一字と断らざれば、  
掛

野遊  
春ハ摘菜の遊びより、  
秋ハ茸狩の真ありて、  
決て春秋の二季

鶉飼  
鶉毎ハ桃の節供ふち、  
あつて、菊の節  
供ふ終るゆれ、  
鶉飼

節供  
何の節供と断  
らざれば、  
節供

鮎、葉  
葉ハ上下の字と断り、  
鮎ハ  
鮎、葉

祭  
四季小まごころ物ハ祭ハ、  
鶉飼の類も、  
祭

鶉飼  
四季小まごころ物ハ祭ハ、  
鶉飼の類も、  
鶉飼

俳諧ハ多用あれハ、  
其名目と断るハ及ぶ、  
其ハ句  
の季子ハついで、  
決て四季小用ふべし、  
以上貞享式  
より抄出

古法可有取捨事  
杜鵑、深見草

柳、櫻、鶯、螢、杜若、芭蕉、蝸

牛、鶺鴒  
此十品ハ象物の數量あり、  
古抄ハ此  
類と音訓ハ替異名ハ呼でハ、  
三つと

四つとも免れ、  
今ハ俳諧の式目ハ、  
一座ハ六つと  
定め、  
古今の取捨ハ、  
此謂あり、  
右ハ十品の名目と  
舉て、  
万物万象の  
凡例とふせ

去嫌可有斟酌事  
父母、男女

主、誰、身、獨、媒

僧、寺  
此二品ハ古式  
定て、  
指合とくるべし

雜

居野いの非ひむとといいどもども今式いましき親王おきなう皇女みづみ天童てんどう

天女てんじよ帝てい御門ごもん仙洞せんどう鬼おに

佛ぶつ此十品ハ古式ハ色々の説ありとゆ人倫あり二句づ去べきなり御門ハ居所三句去べき

若菜わかしき郭公くわくこう松虫まつむし水仙すいせん水鶏みづひひ

三日月さんげつ尾上おしの上此七品ハ會意の名目して決してニツハ有べしとあり會意ハ

二字三字の意と會めてその名を作る故あり字と造まる六書の一なり雪ゆき雨あめ

古式ハ此二品ハ雪四ツ雨二ツとあれども虫むし魚うしよ名類ありとむ雨と四ツあれむし

馬車うまぐるま飯めし餃ぎょう茶ちや酒さけ此八品ハ日用の物あれハ座ハ二ツ

有あ松まつ子この日ひ月つき更科さらしな花はなよ

芳野よし此三品ハ連哥の沙汰ハ鐘かね鉄てつ將しょう酒しゆ

瓜木うりき小妻こつま歎あはれ小木こぎ篠しの小佐こさ羅ら

翠簾すいすずのの昔あゆみ水邊すゐのへ山やま伏ふし山やま類るい夜や

分ぶん此七品ハ古式の嫌ハ物あれど今式ハこの沙汰あり閑伽かんが庭にわ火ひ

轉くる寢ね眠ねむのの字じ起おきのの字じ虫むし砧きぬ

此八品と古式ハ夜分と定められども今式ハ夜分の意ありて指合と繰くるるをを冠かんむり

烏帽くわぼう子こ綿わた小木こぎ棉わた夕立ゆふ立ち小雲こぐも

雨あめ笠かさ鷹たか鳥とり狩かり此五品ハ古式ハ附句と嫌

嫌きらハ總くわてハ彌生やよいひ師走しそ此二品ハ古式ハ古今の違あり

附へしとて打越と嫌ふ  
いづれ、古今の通式あり

指合可有分別事 △あそとあり △

頂とあり △ふとあり △てとあり △  
此四品ハ

古式大事とあれど、  
今式ふい子細あり、  
今式より分別  
**老** △ **親子**  
此二品古式ハ迷懐と成せり

鳴子 △ **網** △ **花鳥の繪** △ **花**  
今式より分別

小櫻 △ **楓** △ **紅葉**  
古式ハ鳴子ハ縮と守る故ハ植物子二句去とあり

のこびあつとてハ分別及むとて生類ハ二句去へ  
細魚鳥と二句去の例あり、或ハ草木鳥獸の絵ハ  
其季くと持あつ、生類植物ハ嫌むとてとるべく  
雑とあつハ論あつ、季と持二句去へきと、これら  
ハ絵の月、喻の花の例あり、凡雅の賞翫とあせる花のみ  
ちの二品と櫻と花ハ面とありて、輕く、楓と紅葉ハ折と

嫌ひて重し何とて二品の差別あり、花ハ三春の艶とい  
ひ紅葉ハ三秋の色とつひて、櫻と楓ハ其体あり、花を紅  
葉ハ其用あり、この故ハ花ハ櫻ふあつと、櫻ふあつと  
あつと、我門の正花論とて、愛ふ論せ、櫻  
も楓も花と紅葉ハ面とありて、只一ツ  
あつと、異体ハ例の數とさつとめむ。

千句有一物之事 △ **鬼** △ **虎** △ **龍** △

女  
此四品ハ連俳の差別あり、新式の一座一句といふ  
所ハ凡五十余名われども、多くハ連哥の用う  
して、俳諧ハ不用あり、鬼味噌といひ  
龍門とハ異体ハ例の數とさつとめむ。

花鳥有一物之事 △ **柳** △ **櫻** △ **鷹**

△ **燕** △ **鶯** △ **菊** △ **千鳥**  
此七品ハ古式より一座一句の物あり

座ふ二句づ有べきとあり、花鳥の名ハ代々考へし

△冬牡丹 △冬椿 △冬梅 △紅梅 △

緋桃 △梅櫻の紅葉 △山吹 △郭公

此八品ハ花鳥の中を只一句めて二句ハあるもの多  
物の凡例なり此段の詮用ハ二句あるべき異体ハ只一  
二句あるべき同体ハ二とあせり  
二句一意の用とあるべきあり

日用可輕物之事 △昔 △曉 △庭

△垣 △袖 △襟 △湯 △汗 △文 △使

此十品ハ古式より二二とあれ  
ど折との替てハ四もあるが  
△照 △曇 △泣

△笑 △植 △荇 △眠 △覺 △起 △居

品ハ日用ハ多用あれハ面と替  
てハ七つもハもあるが  
△目 △鼻 △耳

△口 △手 △足 此六品ハ支体の躰をいふ語  
の用多けし折と替て四も

有り

尤可不審旋之事 △老 △福神 △

親子 凡中古の式目と論じらる第一連俳の用  
不用とをこまきまへて連寄ハ艶詞のあを

字ハ亦二ハ意の理窟とをいへ滑枕言ふ談笑の  
とあらざるより今の俳諧の扱ふとい雲泥のちがひある

事ありそれが中ふと不審をきき沙汰ハ老と述陳と  
表ハ句ふ嫌へと福の神ハ嫌ととも色さるハ彼の理

窟あらめし命の字とめて述陳とあり親子と  
つげく述陳とありこれハ何故か殆りあり

稻妻 △電光 △烏鵲の橋 △龍 △民

の龜 古式ハ稻妻電光と天象ハ嫌とをいふハ鳥  
鵲の橋と生類ハありとも龍と生類ハ嫌

むむとも武の電ハ居所わらざりて今式の不審  
のまうふ用ふべきや但ハ今式の道理ふまうせし嫌之  
△青柳 △菘 △櫻人 古式ハ青柳詠ハ  
春よりて植物みわら

もとも「菘詠ハ秋の由ありて生類ありて冬より  
櫻人詠ハ春の季と持て植物ハ三句より入倫も二  
句より入同三品の詠物ハ三色のちよひあるべきこと  
三別の道理ありとも道ハ一貫の日ありん今式より  
去嫌ハ

△泪の露 △泪の雨 △青楓 △  
例ハ

檉鳥 泪の露ハ降物ありて泪の雨ハ降物みわら  
むとつて御今の細叙も不審あり青楓と

秋の姿よわらば楓ハ紅葉の体ありて若楓の  
下とつて若楓ハ夏よりつて青楓もみわら  
雨所み雨注のちよひありて不審の不審と  
いそし檉鳥と雜ハとと掠鳥ハ勿論也菱喰ハ豆  
まうせしとこの実と好める名ありん論う秋と

曾不及論物之事 △雪小霰 △椿

御今ハ雪ハ霰ハ附句と嫌ハ  
む椿ハ雜あり花と結ひ

春花ハ蓮の実ハ夏より蓮ハ花とり実を結ぶ  
物ありといふこと今式ハ曾て論ち

右古式とむく蕉門一派の確論とむく蕉翁の  
授記と貞享式ハ載りて爰ハ其大畧と記を  
のこ本書ハ季々議論あれバ往てるべしこの  
外の去嫌ハ御今 苧環 通俗志 等みわら

指合 貞享式と合とつてふその同字  
とまもてこととの清濁ハとむく

き耳ふらぬのあり数字も送字も旧式より輕  
ことハ二五ハ山ハつてのとき語路の拍子の耳ふら  
らぬハ二以下ハ決してとむくむ云 余ハ理  
万通と以て准へ知るべし但ハ初心のよりむと古

式小わけとる  
と左小抄出ス **四** いづく ニツ〇折と替べしゆと  
りちとらひくく共たれ

物とを、あふあぞいふいふ  
とのひうつくくニ夕去をり 一夕の物  
排まハニ夕

まぐ 一ツ〇上の五文字ふやく字をり、  
いふせし留まふやく字あり、以上

ニツの内今一夕 三夕 **は** になよ 去

の内のあぶし、 七夕去 **む** ころり 七夕去

し 一ツくまつくく三夕まぐ **とむ** 七夕去

とむ 濁音ニ **小** 小とあり 上夕の小留ハ三夕  
去下夕の小とあ

ハ一座一夕の物とを且あふひありと夕り青藍接ぎ  
小上夕の意と夕け結ふと下夕の格とをさうとさうらひ

あふ小どりてどあをれど意残りて下夕 小とあり

の格とあまむ故あふひありと夕 苗小限  
らむニ

あふとらふ詞き あふとらふ詞き

句去 **ぬ** ぬとぬ とんぬとをんぬハ二夕去  
あり、とんぬと不のぬハきくらむど

但し折合 二句 **ぬ** らんとぬら 去

ときらふ 七句去ありぬらんとま  
ア三句もま **る** 二句去あり、  
志らうく

るのと 青藍云紐鏡よりる五段の  
るると七段のつる、又ハ五段

るのと **る** とあり るると七段のつる、又ハ五段

と打越 ももきらむとるや、炭俵 前妹とらんとら  
うら貫をる、付 僧都のむくまの文とゆ、又打越

ふ嫌 とぬ例ハ同巻ハ終夜尼の持病と押へる、とん  
あゆむとく、残る名月、初ハ小架掛下地

敷て この外作例あわ、畧 **る** らん 二夕去あり、残

るらん の類、 **か** かさね字 俗ハ送字とい  
ふびらうく

らむく の類あり、附てらむく、のらむど、打越ハ嫌  
ふく、送字の句ハ送字の句と附ると、一折ハ一ヶ所

づいまだト **か** **形** 発句の外に願のぶふも今句  
多くいせむ

ある **か** と **か** ニウ 去 **か** ニウ 去 **よ** よの下

知或はめでこさよまむし **れ** 下知のレニ **そ**

さよの類ニウ去あり、 **れ** 去 **つ** 折と **と** 三ツと

**ぞ** ニウ 去 **な** ニウ 去 **あり** ニウ 去 **あり** ニウ 去

ある、あれ、あれや、あらじ、ならん、  
皆附ウ

**あり** 成の字の意あるが附 **成** ウも打越もきらつど **な**

**あ** 並びるも打越るも嫌むと **あ** 深川集花

野ハ錦あり 盛り御室の路の人通ア 麥と菜種乃  
作例多し、 **あれ** **や** **な** **ら** **じ** **な** **ら** **ん**

七句去あり二座 **何** 附ウと嫌 **の** 之打越 **字** **幾** の字 **の** **字**

**あ** ウウ去 **あ** 物あやひそのふかに **あ** 又つきせふふあや

**ら** 去あり **ら** のろりる一字こね **ら** 留りふハニウ去あり **ら** **ら** **ら** **ら** **ら** **ら** **ら**

**ん** ニウ 去 **らん** **あん** **等** **ら** **ん** **あ** **ん** **等**

**う** 打霞打つ **う** の類ニウ去 **う** **う** **う** **う** **う** **う** **う**

**ま** 折と **ま** 折と **ま** 折と **ま** 折と **ま** 折と **ま** 折と

**け** 皆ニウ **け** ニウ 去 **け** ニウ 去 **け** ニウ 去 **け** ニウ 去

**け** 詞面と **け** 詞面と **け** 詞面と **け** 詞面と **け** 詞面と



去 **こ** 杖留 **す** 一座一句千句ふ  
ら三句あがり

上夕のて留三夕去あり、下夕のここふ  
よふ同じふ文字の余ふ注しより、

**さ** づ **ま** づ **ま** づ  
つれなき恋しき  
の類二夕去あり、深き浅き  
のき、附てとこも、

**め** **め** **く**  
二夕去あり、とちありあ  
まき、一座三夕とち

面と嫌 **あ**  
過去の〜と過去の〜二夕去あり、現在の〜  
過去の〜と現在の〜付てもく〜

**あ** **あ** **あ**  
清濁ウリても二夕去あり、ウ  
の腰ふ折合てもとこと嫌ふ、

**て** **留** **ま**  
五の **あ** **ま** **き**  
恋しき〜の  
類、二夕去あり、

**あ** **あ** **あ**  
下夕の内一夕と二夕や、  
出くろふ折と替以上三ツ

**せ** **せ** **せ**  
**あ** **あ** **あ**

せんといふ詞ふするといふ詞 **あ** **あ** **あ**  
二夕去あり、  
するといふ

せんとせ **あ** **あ** **あ**  
あつらひなき  
**あ** **あ** **あ**  
の類二夕去

別吟 **あ** **あ** **あ**  
難波は波、大和は、大紫ふ筑  
紫のこころ、思と同字別吟といふ附夕と嫌ふ

御今折合 **あ** **あ** **あ**  
御今折合といふと、下の中ふ花を見んとて山ふ入  
あふ、あふ、あふ、留の上の夕と附む、又前夕け上夕ふ

秋の夜の明もつるまて月ととて、といふ句ふ、泪ふられて  
あ、腰の折合ふて、文字とまへつ、まてといふ義あり、

ての字ふ限らむ、文字、文字、文字、文字、皆同前、  
まて、まて、まて、まて、まて、まて、まて、まて、まて、まて、

捨て果てあ、い、てか  
附く、い、ま、ら、ふ、あり

正花之事 **あ** **あ** **あ**  
花ハ往古ハ三本あり、を 勅許あ  
つて、宗祇も、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

名残の花と添て百韻ふ四ツとて、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、  
我家の正花論ハ、花ハ櫻ハあらま、櫻ハあらま、

おとわらむ **宇陀法師** 詩六 花と櫻と思ふ作者の

り唐詩の花は牡丹あり吾朝詩奇の花は櫻あり連能  
の花は櫻のことあり牡丹あり花は貴族の格名  
と任まふと花は櫻付の事あり何と正花の句櫻ふ

らむ花は櫻つらむ事あり茶の出花蓋の出花正  
花はさへし先師 芭 申されき猿蓑の俳諧名残の  
花は櫻ありこれを見誤る正花は櫻まふ人あはけ  
り櫻正花あり初心

**春の正花** 花は杜鵑 古式夏と貞享式  
今按むる漢家の

詩あり杜鵑とも蜀魂ともいひ暮春の景物あり  
幸ふ其例と假まき暮春の用とあまきまふ本よ  
ま鷹の巢ふ結む決 **心の花** 春のはの部花心  
して春と定むべし 云 の条は注と詞の

花は正花あり故らふ春のはの部は花守のといこ  
るこれ正花あり故らふ省くたづみ見るを

**夏の正花** 若葉の花 貞享式 今按むる  
月花は凡雅ふ卷の

飾あり踏きける物ハ加減し四季と自由了配ふ  
べし若葉小花と結びて決して夏と定むべし 云

**残る花** 夏の此部 **餘花** 夏のよの **秋の**

**正花** 花火 夜分 花相撲 植物 花燈 あり

**籠** 夜分あり植 **冬は正花** 歸花 餅花 あり

**雑は正花** 一書ふの雑の花は花前ふ  
至て夏冬の季出くの時

花と附る用とさへされど次の附句は春季とや  
るさへるハ例ふ花と重なる蕉門の捌あり 云 ○  
昔蓋云蕉菊のころられさへるハつふ及むを諸門  
人の俳諧ふと雑の正花とさへさあは好むまき

事 **作花** 植物ふ二 **花塗** 漆の事あり **花**  
や **句去あり** **花** 植物は非む

**ういらぎ** 鞘敷小模 **茶の花** 香 **花** 食類あり  
植物は嫌

雑

花形 小鼓あり植 花子狂言 狂言

燈火の花 植物ありあら 花の川 食類

花紅葉 青藍云 炭俵集 貫之が梅

植物あり 津桂の花わらわちとつる其

角う句と秋季了つまう正花とせる例あり

戀の詞

貞享式 我家ハ詞とめて意ハ在也  
一字より嫁と娘とと野老傾城の名目と也  
當句ハ意の姿情多きときハ例の詞と意とせよ此  
ゆより他門より意と一句を捨るとハ方外の沙  
汰ありハ意ハ陰陽の道理ありハ三句より五句ハ  
時ハ意とて意と一句を捨まじき故あり云  
支考云意の一条ハ今式の大事ありて意ハ二句より  
捨まじき陰陽の理のとていひてこの外ハ未然不定  
りごとあらん其故いんとあはれ詞の意ハ字あり

心の意ハ句ハある故その時その句ハむらさき  
句情ハ兼てさるるたごとハ此項の附句ハ普請  
場の飯も一度不事とらひ常の先ハそとて手拭  
とハ附句ハ普請場の臺所ハ只今膳と居んとてそ  
りの埃と掃まらむとより起出る人ハあは折釘  
の手拭と常ハのけく及び越まて出く大工木挽  
の立まらぎて物の世話まきまあるを三句目の作者  
意とありて打越のそとびと轉せんと起情の附方を  
棄てて思ハをぬりぬりのつれあてとい傍輩中の  
あひねふ床の下ある率也川のいさあぬ顔こそ  
あひあらぬまらま前句の作者ハいりて意の心ハ  
まらまも後の眼力ふさてとと意の姿情と見附され  
バ彼と我との二句とありて意ハ決して二句このよし  
○青藍云蕉門ハ意の詞と定まあるハあはれ心の  
何つハ言葉のそとらきわて意とぬりぬりも意句  
とらまらまと作者のそとらきこととれぬハあはれ意の  
詞ハまらまと句作まらまら許六云晋子が句ハ物と  
ハ狂ハ男のそとらきと云ハ意の詞一字カあり

踏みこむ意の句あり近年俳書とて意の詞と梅  
 ぐく、その人の胸中せまきことまきまきなり。云。○意の詞ハ  
 意の志より多しあつたむとて彼ふゆづりてこみハ  
 わらまうと記し、しむる注譯とてこみ初心の便と  
 こい  
 逢意、別意、恋、忍ぶ恋、恨む意、待意、待  
 戀、まゝ意、思ふ意、思ふ恋、絶る恋、絶て久し  
 き意、夏意、契る恋、あつる恋、物思ふ、うき  
 意の奴、恋衣、意草、意の病ハ、思ひ、思ひ川、  
 深き思ひ、思ひの山、思ひの烟り、斤思ひ、相思ひ、  
 思ひの情、うらみ思ふ、思ひの淵、思ひ草、思ひ花、  
 思ふ、情、深き情、薄情、情、あげの情、あげの  
 情、まげの情、まげの情、情、まげの情、まげの情、  
 思ふ、情、深き情、薄情、情、あげの情、あげの  
 情、まげの情、まげの情、情、まげの情、まげの情、  
 等閑の情とあむ、泪川、泪の淵、涙の海、涙の雨、  
 りる心あり、泪、袖の涙、袖の露、袖の海、涙の瀧、  
 袖の雨、涙の川も海も、恨、うらこの山、恨、夢、  
 泪とまぎれ、うらみ、恨、の海、うらみ、夢、  
 ふより恋、夢の通路、夢のうらみ、夢のたぢ  
 ふあり、夢の通路、通ふとて、夢のたぢ

雅語譯解夢の

新枕、若後家、若衆、男色、念者、婿入、婚禮、待女郎、目  
 寺若衆、町若衆、六跡太屋敷の  
 是の隠居さぬ、脚子息の六跡太さぬとて、  
 同年分りの親子の中、畧親ごさぬとて、うらみ、あ  
 のやふ大事ふさるゝあ、い、且那の念者て、あ  
 まい、あ、念者と見分るといふ、い、親分といわ  
 らるゝ、下畧、玉海集、附、句、わたりとて、念者ふたさ  
 うき、別の袖、逢夜、達年、密言、兼  
 限光、言、私言、文、千話、  
 袖引、尻つゝ、門あ、辻あ、  
 前、  
 玉海集、附、句、わたりとて、念者ふたさ  
 うき、別の袖、逢夜、達年、密言、兼  
 限光、言、私言、文、千話、  
 袖引、尻つゝ、門あ、辻あ、  
 前、

契 ちぎり ちぎりの末わぐ契、伊達、身みくつと

二世の契、うさぎちぎり

獨寢、人目 ひとめの 人目の関、目くをせ、神祈 かみ

人目と懸、

憂別、うきこ人、色 いろ、色速 いろはや、まづ比

色このこ、色速ふ

名おろし な、おろし名、りま名、ごま名、みだれ

わご名、わご名、恐ぶ名

心 こころ、待 まち、待宵、まろ人、まろ君、鏡 かがみ

うろこ心

まろ人、まろ君、

十寸鏡、占 うら、占方、辻占、夕卦、ふ ゆげ

十寸鏡

占方、

占、

口占、

灰占、

夕卦、

夕暮辻占

て初めて暮

人の詞を思ふ人、形見、出家落 しゅつが、墮落 だらく

人の詞を思ふ人

の吉凶を占ふと云こ

坊主おとし、哥比丘尼 わくにん

坊主

おとし

哥

比丘尼

名所記

万治

卯本

卷の

二云いつの頃、比丘尼の伊勢熊野小まうで、行とつとめ、よこの舟子これ伊勢熊野よまのふ此故ふ熊野

比丘尼と名く其中小声よく哥ささひく、尼のあり

て、うらうて勧進、

中

畧絵とまとも

よこ

よこ

を

を

あがり、故ふ意の詞よい、せま、あ、い、い

あがり、肌ぬり、媒、恪氣、口子

あがり

肌ぬり

媒

恪氣

口子

あがり

あがり

あがり

あがり

二心、縁、諸白髪

二心

縁

縁

縁

縁

縁

縁

縁

縁

蓮の上の契、父あ子、結ぶの神

蓮の上

の契

父あ

子

結ぶ

の神

懸想文賣、水祝ひ

懸想

文賣

水祝

ひ

懸想

懸想

懸想

常陸帯、筑摩鍋

常陸

帯

筑摩

鍋

常陸

常陸

常陸

常陸

常陸

雑喉寝、願は

雑喉

寝

雑喉

雑喉

雑喉

雑喉

雑喉

雑喉

雑喉

き、子をおろし、仇く

き

子

おろし

仇

く

き

き

き

き

雑

實情ハ薄

してたぐひく恨らう恨らう  
垣間見 物のひまあり

虫の印 守宮の血と女の

一期消 春心と動うせ

龍子と名く守宮の名ハ秦の始皇帝宮人の私

小守宮の名 轉合中戀

薄中心中、やりあり、惚らう

ぬらう心、後よび 後妻と

和名抄後妻、うらまあり打 打とらふ

和名宇波奈利、後妻とむらうふとのまらふよりく前の妻と

某の日某の時うらまあり打

ゆく、さあ、さあ、さあ、某の日ふ至れん、前妻とえに

わらして後の妻のく行基所より今うらまあり打

後の妻のうらまあり、さあ、さあ、さあ、さあ、さあ、さあ

前妻後妻の媒せりの妻と待女郎よりうらまありと双方の中

日記 室物業 小後妻打の

事ハせざらん、古くよりあり、事あり、玉海集 前浅

縁元龜のころまで有、さあ、さあ、さあ、さあ、さあ、さあ

ぬく、曉起、さあ、さあ、さあ、さあ、さあ、さあ

下紐、身とあがのそ、指切、髪切、股

突、尻目づらひ、思ひさま

年来深く

ものぢりの中の人の中言ふ又思ひの外ふ  
仇ふま支ありくその思ひのまぢり  
偽り

難面、うとほも、  
休、背きくこの

中、  
心中、恨じことの出来て解さるあり、それより

何事も背き、  
妬む、嫉妬、艶、物の怪

意の恨み、うりあせ、  
後めこき、  
雅語譯解後

生霊、死霊とり、  
枕あらざる、  
長枕、二つ枕、  
うを枕、手枕、

ウサシナ、キガユルセヌ、  
とりの意あり云、  
近まらざる、  
近くてこれ、遠目より、  
近おと

近まらざる、  
近まらざるの、  
仇めく、  
古はる、  
見捨ら

忘らる、  
親さる中、  
此詞二、  
義ありた親と

ちのらひて、我あふゆのめ、  
又あつ、思ひうを、  
親の制し、避てあ、  
一、  
二道かぐる、  
蜘蛛のおこまひ、  
日本紀わ、  
かせこが未

べき、宵のり、  
濡衣、  
あ、  
名、  
或書云、  
むり、  
筑前守あり、  
人の娘、  
継母の、  
絶言ふ、  
その、  
ぬい、  
濡衣と借取て、  
娘が、  
朝寐、  
し、  
所、  
む、  
その、  
衣と娘が、  
盗う、  
し、  
と、  
む、  
父、  
と、  
娘と害、  
其、  
の、  
ち、  
の、  
娘、  
父、  
が、  
夢、  
み、  
と、  
よ、  
め、  
の、  
奇、  
ぬ、  
ま、  
ら、  
の、  
其、  
ま、  
ら、  
の、  
ぬ、  
れ、  
衣、  
長、  
さ、  
あ、  
の、  
ち、  
あ、  
り、  
り、  
云、  
名、  
ふ、  
ら、  
説、  
と、  
設、  
け、  
ら、  
る、  
金、  
は、  
ま、  
ら、  
づ、  
く、  
駒、  
人、  
の、  
意、  
ら、  
る、  
人、  
の、  
乗、  
ら、  
る、  
金、  
後、  
頼、  
基、  
も、  
あ、  
ら、  
し、  
袖、  
ぞ、  
ゆ、  
り、  
ま、  
我、  
駒、  
の、  
つ、  
ま、  
ら、  
づ、  
く、  
身、  
と、  
ら、  
は、  
垣、  
山、  
の、  
朱、  
雀、  
あ、  
り、  
遊、  
女、  
此、  
所、  
錦、  
木、  
ひ、  
ら、  
陸、  
奥、  
あ、  
り、  
お、  
這、  
客、  
と、  
送、  
る、  
故、  
ふ、  
名、  
く、  
り、  
女、  
の、  
門、  
ふ、  
立、  
る、  
木、

日本紀わ、  
かせこが未

あ、  
名、  
或書云、

むり、  
筑前守あり、  
人の娘、  
継母の、  
絶言ふ、

その、  
ぬい、  
濡衣と借取て、  
娘が、  
朝寐、  
し、

所、  
む、  
その、  
衣と娘が、  
盗う、  
し、  
と、  
む、  
父、  
と、  
娘と害、  
其、  
の、  
ち、  
の、  
娘、  
父、  
が、  
夢、  
み、  
と、  
よ、  
め、  
の、  
奇、  
ぬ、  
ま、  
ら、  
の、  
其、  
ま、  
ら、  
の、  
ぬ、  
れ、  
衣、  
長、  
さ、  
あ、  
の、  
ち、  
あ、  
り、  
り、  
云、  
名、  
ふ、  
ら、  
説、  
と、  
設、  
け、  
ら、  
る、  
金、  
は、  
ま、  
ら、  
づ、  
く、  
駒、  
人、  
の、  
意、  
ら、  
る、  
人、  
の、  
乗、  
ら、  
る、  
金、  
後、  
頼、  
基、  
も、  
あ、  
ら、  
し、  
袖、  
ぞ、  
ゆ、  
り、  
ま、  
我、  
駒、  
の、  
つ、  
ま、  
ら、  
づ、  
く、  
身、  
と、  
ら、  
は、  
垣、  
山、  
の、  
朱、  
雀、  
あ、  
り、  
遊、  
女、  
此、  
所、  
錦、  
木、  
ひ、  
ら、  
陸、  
奥、  
あ、  
り、  
お、  
這、  
客、  
と、  
送、  
る、  
故、  
ふ、  
名、  
く、  
り、  
女、  
の、  
門、  
ふ、  
立、  
る、  
木、

後、  
頼、  
基、  
も、  
あ、  
ら、  
し、  
袖、  
ぞ、  
ゆ、  
り、  
ま、  
我、  
駒、  
の、  
つ、  
ま、  
ら、  
づ、  
く、  
身、  
と、  
ら、  
は、  
垣、  
山、  
の、  
朱、  
雀、  
あ、  
り、  
遊、  
女、  
此、  
所、  
錦、  
木、  
ひ、  
ら、  
陸、  
奥、  
あ、  
り、  
お、  
這、  
客、  
と、  
送、  
る、  
故、  
ふ、  
名、  
く、  
り、  
女、  
の、  
門、  
ふ、  
立、  
る、  
木、

の、  
朱、  
雀、  
あ、  
り、  
遊、  
女、  
此、  
所、  
錦、  
木、  
ひ、  
ら、  
陸、  
奥、  
あ、  
り、  
お、  
這、  
客、  
と、  
送、  
る、  
故、  
ふ、  
名、  
く、  
り、  
女、  
の、  
門、  
ふ、  
立、  
る、  
木、

這、  
客、  
と、  
送、  
る、  
故、  
ふ、  
名、  
く、  
り、  
女、  
の、  
門、  
ふ、  
立、  
る、  
木、

ありその木ハ一尺ざりありて五色ふ彩りてその  
やちふ錦木といふこと **詞花集** 女のひらひらふ立初

錦木の千束あしてちちふも **誓文、起請**  
がね 匡房より外古奇ぢやい

男女ふひふ神文 **かこねる香** 女のぬきういも  
しとちとちとちと

沓のわづのり重 **肉陣** 肉屏 **天室遺事** 楊國  
ありて 殿ととも

の肥大なる者と前ふ行列て風と遮りし蓋 **後**  
人の氣を藉て相暖む故ふらとと肉陣といふ

**宮** 禁闕中美人 **美人の名、美人と畫**  
の在所といふ

**漢書** 王牆字ハ昭君漢の元帝の官人也云 **西京**  
**雜記** 元帝後宮既ふ多し常ふ見るととを得て乃+

画工として形と畫せしら画と筆してるとと幸とて  
諸宮人皆画工に賂を巧王昭君も遂ふ見るとと

えむ白奴朝ふ入て美人と求め関氏ふせんとも爰ふ  
於て上面と案して昭君と以て行つて去ふ及んで

召て貌とらるふ後宮才一とと帝とと悔じ名  
藉已不定る帝信と外國小重人を故ふま一人を

更も乃其事を窮案して画工と市ふ **返三鬼**  
垂つて漢書琴操水の説述ふ異

**香** 李夫人ハ李延年の妹武帝の夫人あり返魂  
香の二あり世人のあふるととふあふを思ふと

**空焼** 薰物 留伽羅 袖の移る香 **化粧**  
あせ籠 枕香炉 うつり香

**紅粉** 白粉 瓜紅 皀 黛 **白掃**  
あふ

**匂ひ袋** 不二額 九額 密男  
あふ

**妹許ゆく** 女のゆく **紅絹** 白陀羅尼管の  
ゆくあり

うねとつる桑白ふ春の朝日ふ紅絹の水をりといふ  
支考の服ありしは恋匂ふをて匂体ふのさる

**夫** せふハ東國の方言 **夫婦** 男と女相互  
ふ夫とていふ

**雑**



女房

女房、男房、かき官人の称あり、今

立女

外婦

房、寝所あり、閨中ハ、

花街

室の津、神奇、江口、大義、祇園町、

主日樓

浅妻船、吉原の里、嶋原の里、新町の里、

宿門

浮身宿、同船、遊女、

禿

辻君、女郎、た、傾城、

水あ

開卷一笑了、髮妓、

飲りけり

の幼稚者、鶉老、

原の里へ

げ、まひ付煙草、つけどし、

比翼座、忍び編笠、

手編笠、まご手前編笠ともいへり、

江戸吉原の花街中、後朝雨、

其角、七八、

樂、舞姫、

野郎、色、陰間、

神媒、

切字、

例の何れもあつたところの故とあり、

雑

るべし、とある。切字の用より、物ふ對して差別の  
 義あり、こゝには是どと増とつけて、物に二三小を、故小  
 始あり終ありて二夕一章の発句とあるなり、九切字  
 の品よりハ、或ハ一字の働あり、やの字よの字の類  
 としハ、或ハ餘韻の助字とあせるハ、の字むの字の類  
 としハ、其外ハ何論と云ふハ、哉来と治定とあるを迷  
 悟と動けハ、靜と云ふハ、物に相對の道理あり、やハ、  
 発句の切とのいひて、字と定むるハ、及びど、耶と  
 云ふハ、鳥と云ふハ、哉来と治定をれと云ふ道理と  
 云ふハ、人もおのつら、発句のさか、あはれ、を、我が家  
 みに心切といひ、中の切といひ、挨拶切といひ、名ありて、こ  
 り心詞をつひのせ、ハ、性、ある切字ハ、あり、○青藍云切  
 字ハ、心と切、ハ、意と首尾させん、が、あ、あ、い、あ、  
 へ定、と、切字、あ、と、心切首尾、と、の、い、と、ハ、發句  
 あり、但し、心と、き、り、を、下、夕、ハ、  
 及び、ま、と、平、夕、の、格、を、例ハ、何故、や、  
 この、時、と、ある、とき、ハ、夕、作、ハ、自、在、の、働、有、し、

中の切

袖の恋、や、し、時、移、や、の、朧、月、 芭蕉  
 た、く、と、出、て、い、ま、よ、月、の、雲

心の切

雪見、小、き、り、ハ、所、ま、て、  
 せ、と、花、あ、け、し、き、い、え、む、蟬、の、声

挨拶切

世と發、ハ、代、り、く、小、田、の、行、度、り、  
 人、ハ、家、と、買、せ、て、我、ハ、年、忘、

二字切

君、火、と、け、よ、き、物、と、せ、ハ、雪、丸、け、

三字切

子供らよ、昼顔咲ぬ、瓜むえ、

二段切

夕も、朝も、つるも、瓜の花  
 空、雞、也、空、也、の、瘦、也、寒、の、内、

三段切

梅、若、菜、ま、り、子、の、宿、の、と、ろ、汁、

とまはし

青、く、と、れ、有、き、物、と、唐、く、ら、じ  
 米、と、く、友、と、今、宵、の、月、の、客、

わまはし

桐、の、木、ハ、鶉、鳴、ら、る、堀、の、内、  
 柘、の、花、ハ、昔、ま、の、と、ん、料、理、の、間、

玄妙切

春、ち、や、り、き、と、の、ハ、月、と、梅、  
 わ、く、と、日、ハ、つ、れ、あ、く、も、秋、の、風、

雜



まゝぬ、まゝぬ、思ひぬ、おもひぬ、つつハ大と  
とるゆゑと付らぬ、ぬ、切らぬ、あ、  
里語ふあゝなり、**猿蓑**いぬ、**下知の詞**見よ、  
と人わいさむらぶ、の暮路通

ましていけ、お人ふ下知まる、**加**疑ひのか、  
如くあると、い、皆切らぬ、**切**あり、**ゆ**  
聞ゆる、見ゆる、あ、い、**よ**下知ふあゝなるよ、  
べきと、聞ゆる、見ゆると切、**猿蓑**鴨のわ、野

中の杭よ、**奥の細道**蛤の二見へ、  
十月、**芭蕉**、**灰俵**八巻と、  
若衆を大根引、**ど**寒、  
野坡此類のぞ、**ど**のり、**芭蕉**、**猿蓑**志  
わんこの藪う、凡そあつらひ、野童この類のぞ  
ハ疑のやの条ふら、詞あて、結む、**詰格**との後

**ふ何そ** あハ勿の意あり、**盃**ふ、**これ**  
泥ふおと、**村**、**芭蕉**、**下**  
おけ、**白魚**ふ價あるこそ恨ある、**芭蕉**  
**詰格**とのぞ、

つづらへ、**断**こそと、**挑**の花全の又一例  
**猿蓑**初、追々、**利**、**お**

**ん** あ、**抄**世お願ひのふんと、**詞**と  
と詠らつる詞あり、**ら**ん、**ら**ん  
お、**同上**今より後と、**ら**ん  
し、**同上**其心、**ら**ん

**同上** 其心の、**ら**ん  
と、**同上**らんより、**芳野紀行**  
根越人もある、**け**の字の、  
今朝の雪、**芭蕉**、**け**の字の、

**まし** あ、**抄**世の中、**櫻**の、  
ま、**同上**らんより、**続虚栗**、  
花の隅、**ま**、**め**

其角、**め**  
行、**め**

わゆる抄 その大むひとありしよりてつるひふ心あり

里言のオモキチヤ、ヤウスチヤあどりのふは似たり 古今

よつて川カみらるゝれてあづる わゆる抄 ナア

めりてくらげ錦中ちとらむむ な と人ふひつる

詞より思ひあもまりていひてこもあもひふあ

一 曠野 二日つゆめりつりせし花の春 芭蕉

炭俵 い 春と雀のうき わゆる抄 其

袴 酒堂この類のを切る し けきわひを

ちふふくありてよきちとあり なり たりて

とそりさきあてりふ詞あり あり ありて

ちれ なり あり

詞あり なり あり

わゆる抄 あり あり

ありとて人とうごのそそり あり あり

ノとひ心とく あり あり

ふとひとふふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

ふ あり あり

神祇の格

尊きふれお合ぬ御遷官 芭蕉  
猶も花ふ明や神の顔

雑

同じ類の詞もどもとの落着 か さい

と決定し や さい

自然とや と さい

古今 春の夜の闇 あ さい

は香西 は さい

し心 し さい

さ さ さい

何 何 さい

誰 誰 さい

不動言の切

青藍云切字 あ さい

ハ大 ハ さい

暮 暮 さい

さ さ さい

先哲の作例

うくの如し

釈教の格

涅槃会や数珠の音、  
灌仏の日ふ生れぬ鹿の子うね

戀の格

紅梅やよみ恋つくる玉簾

無常の格

あつと死ぬるきこえは蟬の聲  
竟祭々つゆ焼場のくもり

追善の格

秋凡ふされてくぬき桑の杖  
當帰より哀の塚の菫草

迷懐の格

ふらふと膝の緒ゆるく暮春  
父母のなきうしろひ雉の聲

羈旅の格

ひらつ脱てうろふぬぬ更衣  
年くれぬ笠きて草鞋をぬがら

餞別の格

鮎の子の白魚送る別くれ  
此心推せよ花ふ土器一具

名所の格

五月雨ふくれぬ物や瀬田の橋  
松島や千々ふとて夏の海

即興の格

景清も花見の座ふハ七兵衛  
ひらきけ杖父のくく角力取

昼晷の格

標ゆふと手ふとまむ額髪  
降とてし竹植る日ハ暮と笠

昼讚の格

山吹や宇治の焙炉の白ふ時  
わらじの俳諧とてんぬる胡蝶

置字の格

奈良七重七堂伽藍ハ重櫻  
昼顔ふひるぬせうもの床の山

時宜の格

梅白しきのつね雀とぬるまけ  
やとり木子猶やう木や梅の花

時宜とハ其時小暇と其人と對して情と迷るとのふ  
前の一章ハ野さらししの紀行ハ三井秋風ハ山家と訪  
ふといふ端書ありくわとと林和靖よ比くもある  
時宜あり後の一章ハ曠野集ふ出て細代民部息  
ふあひてとる端書あり句意ハ笈日記ふこれハ  
其父弘氏の主此道の凡雅ふ名ある故あべと云

賀の格

先祝へ梅と心の冬こもり

雑の格

ちろちろ杖突坂と落馬哉  
あきよとこふ誰松島とてこ心







江都

須原屋 茂之衛  
山城屋 佐之衛  
岡田屋 嘉七

尾州名古屋

永樂屋 東四郎  
菱屋 孫之衛

勢前津

山形屋 信吉衛門

京都

吉野屋 仁之衛  
株屋 勘之衛

阿州徳島

天満屋 武之衛

娘路

本莊 興次

訪州徳山

浅田屋 孫之衛

